

覽書

満州佐伯村おぼえ書 七

へ第十次昌圖佐伯開拓団小史へ

会員 矢野 徳 弥

三、部落経営移行

入植第一年度は、団一本の共同経営であったが、第二年度に入り、分散して部落経営に移行した。

部落経営といっても、佐伯開拓団の場合は二十〜三十戸を一単位とする部落経営ではなく、その次の段階である五十〜十戸の小部落経営、つまり班経営のことを意味する。これは自立までの過程と二か年短縮することであった。

当初計画

- 第一年度ー共同経営 第二年度ー部落経営
- 第三年度ー班経営 第四年度ー班経営
- 第五年度ー自立経営

修正計画

- 第一年度ー共同経営 第二年度ー班経営
- 第三年度ー自立経営

部落経営（佐伯開拓団の呼称による、班経営のことである）移行に伴う部落の編成は、

○大榆樹

郭牛園の後方四百メートル余の地点にあり、川原木

村出身者が新しく進出、二つの経営グループを組む。
六馬家

大平山の西北、やはり本部寄りの地点にあり、先遣隊北山武雄が近縁者を中心パーグループを組み、新しく進出。

○大平山

先登部落の一つで、水田地帯の中心にあり、直見村出身者十一戸が集まり、一グループを組む。

○郭牛園

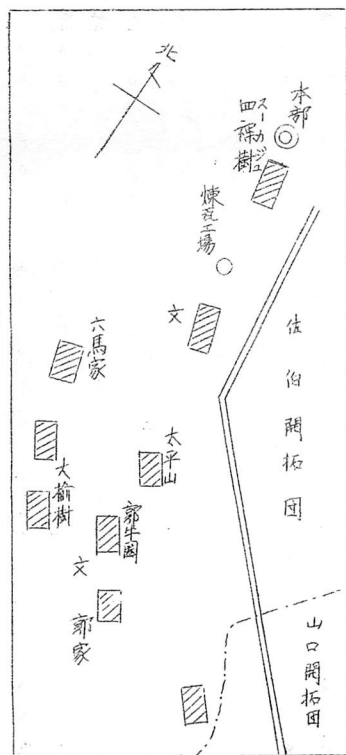
先登部落の一つで、明治・上野両村出身者を中心パーグループを結成

○郭家

同じく先登部落の一つで、中野・因尾両村出身者を主体パーグループを結成

各グループには長がおかれ、団長がこれを任命した。（部落長といった。）

部落長は、そのグループの経営責任を負うと同時に、部落長会を結成して団の運営に参画した。団では、部落の名称を固有の地名によらず、しばしば



その長の名を冠して、大友部落（太平山）長は、大友新二郎、春山部落（大榎樹）長は春山藤夫、北山部落（祇園）理由によるなどと呼んでいた。

部落の大小は既設家屋の多少に支配されたが、地域全般が平坦な畑作地帯であったことから集落は散在し、一か所三〜五戸といった規模のものが多く、大型の草房には二組同居させても、せいぜい五〜七戸どまりであった。しかし、このグループのさして大きくないことが、結果として共同経営を順調に経過させる一因になった感がある。

次にグループの経営の内容に触れてみよう。この時期、土地・建物・家畜・大農具のいずれも団の管理下にあり、グループ毎に貸典の形をとっていた。しかし、各自の管理下に託されている家畜・大農具等は、自主経営移行の際、その者の所有となることが予定され、家屋についても、現在地で自立する場合は、そのまま居住者に譲渡される金みを持っていった。ただ土地については、自立時そのまま譲分するに足らぬ面積が不足していたため、幾分の異動が見込まれていた。

とくに水田は、グループの経営に移行してからも相当造成が進められた。これは後述するように、新団員を受け入れたためである。

グループの経営移行後も、畑作は全面的に現地の農夫の手に任せ、団員達はもっぱら水田稲作に専念した。ただ野菜や西瓜・甜瓜（まくわ）一種一方向の換金作物は自分達の手で栽培した。

食事も共同炊事で、食器も軍隊と同じようにアルミのものが使われていた。

収穫物や収益金の配分は、出役の人員と日数により計算された。

このため老人や病人を抱え労力の少ない家と、健康で働き手の多い家の間に隔差が生まれ、一部で不満の声も聞かれたが、総じて収穫に恵まれ、またグループの編成も、地縁・血縁を主体とするものであったから、さして問題化しなかつたと伝えられている。

四 本隊入植の不振

四月に入り、待望の本隊が入植することになった。変更された計画によれば、第一次八〇戸がその目標であった。

ところが実際に入ってきたのは、川原水村出身者を主体とする十数戸であった。

現地側では計画どおりの数字は別として、少なくとも五十戸程度の入植があると見ていただけに、その失望は大変なものであった。

後述する不振の原因は、いうまでもなく戦争による日本内地の状況悪化にあった。

「支那事変の進展とともに軍需員の強化、軍需産業・生産拡充産業への労務需要の飛躍的増大等により、国内の労務需給関係は急激に緊迫化し、さらに食糧不足による国内増産の要請、および諸物資の不足等の諸事情が重積したため、開拓民送込は逐次困難さが増え来り、一部においては、一時これを見合わせるべしとの論さえ台頭するに至った。」

と、拓務省が嘆きを見せ始めたその時、新たに対米英鐵に突入し、大きく国運を賭すことになったのである。

村から移住適格者とされる兵隊終了後の壮年男子は、悉く姿を消していた。

そして各種物資の欠乏により、生活は全般に不自由さを加えていたものの、戦時インフレは母村の寸分ずみま

で浸透し、かつて、矢野武吉半農村の指導者たちが、懐
性的、構造的名窮乏からの脱出を思いつめたおぼく分村
に踏み切った、當時のような経済的窮迫感、もはや分村
のどこにも見られなかった。農村経済更正のための満州
分村の意義は、ひどく薄らいだかのようにであった。

しかし、こうした状況の中で、直見村は断然計画どお
りの入植者を送り、川原木村もまた現地の要請に充分応
えていた。

本隊は全員家族を帯同して入団した。
団は本隊の受け入れにあたり、本隊員だけによる共同
経営の方式を避け、これを充足したばかりの先登グルー
プの中に配し、その指導と援助の下に、翌年度の自立を
目指し建設に取組むよう配慮した。

例えれば次のようである。

○ 三浦部落 (大榆樹)

三浦 (先遣隊) 柳井 勇 (先遣隊柳井重水・啓
の父) 黒木一男 (本隊) 村上宇一 (本隊)

大竹仙治 (本隊)

○ 春山部落 (大榆樹)

春山藤夫 (先遣隊) 曾根田重正 (補充先遣隊)

大竹利夫 (本隊) 村上 武 (本隊)

坂出 某 (本隊)

五 第二年次勤務奉仕隊

昭和十七年の勤務奉仕隊は、三月二十三日、佐伯市大
手前町の南海郡農会で会議を開き、一村当り六名、七か
村で四十二名の派遣を決めた。

しかし実際には四名欠けて三十八名となり、四月六日
佐伯駅を出發、渡満した。隊長は高島真徳美 (直見村)
であった。

一行は、四月十一日現地に入り、四條橋の本部前にあ
る大きな民家を宿舎とし、それから毎日六キロの道を歩
いて、農場に通う生活が始められた。

ことしは、団が部落経営に移行したことにより、奉仕
隊も独自の生産集団として稲作に取組むことが指示さ
れ、四十町歩の水田が供えられた。隊員一人当りの耕作
面積一町歩、米穀増産目標十二石 (反当一石二斗である
から、かなり低い収量である) という、政府の要請に従
ったのである。

このとき隊員であった高野繁の語によると、奉仕隊
で新たな開田は行なわなかったというから、前年の耕作
面積七十町歩の外に、相当開田が進められていたことが
うかがえる。農場は、長嶺子の西南方ニキロの地点にあ
り、山口開拓団に隣接し、近くに穀戸の朝鮮人農家が、
同じように水田を耕作していたという。

この奉仕隊については、あまり記録らしいものが残さ
れていない。ただ隊員であった人々によって、今だに忘
れられないという、風変わりな体操、やまとばたらぎ、に
ついて、少し詳しく紹介しておこう。

一般に、奉仕隊員の生活は、滿蒙開拓青少年義勇隊へ
日本国外では義勇軍といっていた) の訓練生活に模する面が多
く、起床・点呼・食事・作業から、消灯・就寝に至るま
で、ラッパの合図で規則正しく行なわれたが、この中で
朝の点呼に続いて行なわれた「やまとばたらぎ」という、
おそろしく神がかりな体操には、ひどくへきえきさせら
れたという。

これは、当番・茨城高等農林学校の校長で、義勇隊の
原隊訓練所副所でもあった藤完治が、自分の信奉する
皇國神道へ従は、農は天照大神の示された道である。神
を思い、神と一体となり、農に徹することこそ、
現人神

である天皇に仕える道である」と、いつも主張していた。の實踐をはかり、神と一体となる修練の業としてこれと創案したもので（一説には皇國神道學者、眞克彦の作ともいわれる。多分、両者の合作であるう。）先ずこれを全養隊員に実行させ、また開拓団幹部の訓練にも取入れて、広く開拓民全員に普及すると共に、也かては皇國農民全体に徹底しようとするものであった。

佐伯開拓団でも、入植初期の共同生活の間、毎朝この体操を続けてきたが、家族がはいって世帯が孤立し、また耕作に意欲を傾けるようになると、だんだんに忘れられ、その頃では、奉仕隊だけがこれを行なわされてきた。當時の日本を震動していた狂気のようなものが感じさせられ、興味深い。（資料 高橋正道）

日本体操（やまとびとらき）の動作

- 一、立て——まずおじぎ。腕を前に挙げ、横に開き、静かにおろす。動作はおおらかにやる。（天地の開きに神聖な自己を確定する意味と教えられる。）
- 二、みたましずめ——両手を丹田において、腹式呼吸。（産靈の働きを各自の中に宿したる自然の容姿と考える。）
- 三、おろがめ——一拝。最敬礼の如くする。（天地の大きな統括者に帰依せんとする。）
- 四、抛げ、棄て——片足を前に出し、片腕を突き出す動作。左右各一回、十六動作。（永遠の彼方に自己の不完全を投棄する意）
- 五、吹き、棄て——手を腰にとり、大きく息をはく。アー、ウー、オー（四と同じ意）
- 六、いぎ進め——足踏み。十六呼吸、四十八歩。（飛躍の信仰を固く持し、前進。）
- 七、いぎ滑げ——船を滑ぐ動作。左右一回。（理想の彼岸にこぎ進まんとする意）

岸にこぎ進まんとする意）

八、参い上れ——土俵入り雲龍のような動作。（一大飛躍、理想の世界高天原に上るの意という）

九、気吹き——吹き、棄てに同じ。

三、神楽び——三動作に分れる。

○心作業 腕の運動。手を肩に、前、上、後に屈伸。

○真さき 頸の運動、前後左右に屈し、次で廻す。

○日かけ 上体の運動、前後左右に屈し、次で左右に廻す。

○五百津真栄木 いおつは肩の運動、手を乳の付近にあって、腕を前に廻す。まさかおは手首の運動。腰の付近におき、手首を前に廻す。

（三つの動作を通じくつなく、神の世界に遊ぶ。神になつた氣持という。）

——いわゆる体操は一応これで終り、次いで朗誦が始まる。

二、ひと笑い——復唱（リーダーの後につけて発唱）

かれ。高天の原 舞りて。八百餘神 共に笑ひまき。

三、出まし——単唱する

かれ。天照大神 出でませる時は、高天の原も葦原の中つ國も、自ら照り明りき。

三、天晴 おけ。——二拝二拍手。次に復唱または同唱で、天晴れ。あな面白。あな手伸。あな明け。

おけ。そして二拍手一拝。

四、みことのり——リーダーの単唱

○天照大神 神詔り給はく

葦原千五百秋の瑞穂の國はこれ吾子孫の王たるべき地なり。尊皇孫就てまして治らしめした

まへ。さきくましませ。空杯の騰えまさんこと
は天壤のむた無窮なるべきもぞと詔り給ひき。
○高皇産靈神詔り給はく、

吾は則ち天津神籬及び天津磐境を樹起て吾孫の
為めに齋ひまつらむ。汝天兒屋根命太玉命は天
洋神籬を持ちて葦原の中つ國に降りて亦吾孫の
為めに齋ひまつれと詔り給ひき。

三、あまくたり

復唱で行なう。

○ここに天津取子能通命に詔りごちて、
岩位を離れ、天の八重棚引雲を押し分けて、稜威
の道別き道別きて天浮橋に浮洲在、
筑紫の日向の高千穂の久士布流峰に天降りましき
○於是詔り給はく、「此地は、朝日の直刺す國、夕日
の日照る國なり、彼此そ甚き地」と詔り給ひて、
底つ岩根に宮柱太知り、高天原に氷敷高知りて坐
しましき。

三、

いやさか——二拝ニ拍手。天皇陛下いさか——い
やさか——い——や——さ——か——。二拝ニ拍手一拝。

これで終りである。そしてこの体操の数の呼称がまた
変っていた。一、二、三、四に代り「ヒ、フ、ミ、ヨ、イ、ム、ナ、
ヤ。コ、ト、モ、モ、チ、ヨ、ロ、ズ」の十六呼称が使われ
たのである。

隊員達は、自分達の手で稻刈り取り、これを圃に託
して、十月上旬に帰國した。六か月の現地生活に馴染ん
だ隊員の中から、残留を希望する者が多数出て、団員達
を喜ばせた。このとき入圃したのは次の人達である。

柴田良雄(中野) 柳井久傳(中野) 高野繁(中野)

甲斐一馬(切畑) 安藤義広(因尾) 五十川栄(切畑)

この中、高野繁は一か月ばかり本部で事務手伝いの

後、市原福太郎に代つて駅前弁事延に派遣され、二十年
三月まで勤務した。また、他の五名は本部勤務となり、
翌年二月まで四稜樹で共同生活を行つた。

六 学校の整備

本隊が入植すると生徒数も増加して、三十二名になつ
た。

かねてから、圃では学校の教師にも郷土出身者をいれ
新しい村の基礎は学校を中心とした人間造りから進めたい
と願つていた。そこに本隊と共に、森脇辨一と河野イ
マがやつてきた。

森脇は下野田村の出身で、当時四十五才、中野小学校
長在任中の団長の矢野と知り合い、佐伯村分村のことが
決まると、「八絃一字の大理想を教育に顕現する絶好の
機会」とばかりに早速参加を申し入れ、入植一年にして
開拓村の基礎が定まつたと知り、早々と赴任して来たも
のであった。

大坂で一見加藤完治に似た風貌を持つ、皇國神道思
想に大きく共鳴していた。生来の好人物で、大ぎやうな
身振りと、キャンキャン声の持主で妙に人なつこく、
子供や現地人にも圧倒的な人気があった。開拓地の教育
者としては、うってつけの人物であった。

河野は大野郡重岡村の出身で、当時三十二才。南海部
郡内のいくつかの小学校で教鞭をとり、豊富な現場経験
を持つていた。女生徒のため家事・裁縫の指導もできる
女の先生がほしいという強い団員の希望により、実兄吉
良清治(補充先遣隊)の説得もあり、今回赴任して来た
のであった。

森脇校長は、着任すると直ちに青年学校を併設し、青
年達に得意の皇國神道を説くともにも、児玉環(先遣隊

陸軍上等兵)を指導員に任命して、軍事教練や銃剣術の指導を開始した。

六月に入ると、校舎新築のことが本決まりとなり、四平省日本人学校組合の手で、太平山と四標樹の間にある高深畑跡に、敷地の造成が始められ、これと並行して本部の南側二百以上の位置に、大型の煉瓦工場がつくられ、大勢の現地人勞工が入って煉瓦の製造が開始され、工事は冬に入って本格化した。(つづく)

記録

ふる里 佐伯の陶芸展

期日 十一月二日・三日
会場 佐伯文化会館
主催 佐伯史談会

ふる里へ佐伯市(南海部郡)の歴史的な陶芸、現在楽焼を楽しんでいられる十人ばかりの方々の作品などを、一堂に集めて都市の人々に見ていただくこと。この決定があった。まづ先に手がれたことは、波越焼の薬物と久部焼のものとの探索であった。水が谷焼はもう確認していた。そして上久部の窯跡の発掘、破片採集をした上で、実行計画が清田会員の手で進められた。

まごろしの波越焼を、若しまぎれのうたい言葉として暮をおけたが、多年陶芸を手かけて来られた平田土半先生のおがげと、お寺さんや佐伯出身の清家先生、外数人の方々の格別なご快賛によって、予想をはるかに越す盛況であった。

中でも、本匠村の高橋智会員は、久部の窯跡から発掘の陶器片の土色・うわぐすりから、自定覆蔵の水さしとよりにかえり、箱書の一久部村直五郎の作者まではつきりした久部焼を確証、追加展示して下さった。尚二日

日目は、波越の窯跡の発掘破片から、これこそ本物と思われ、大きな壺を出陳下さった。

しかし点数については、やはり楽焼が最も多く、平田先生の休養が日取も多く、船頭町の米本夫へのもの、福泉寺、願成寺の両和尚、養賢寺老師お三方のものは閑雅で観衆の心をとりえた。異彩を放っていたのは別府市の清家先生の饅頭窯の複製品、筆麗眼を奪うばかりであった。

畑野浦の保壽所の子才幼児の陶板画の作品多数も、今後ふる里陶芸の進展に、一つの示唆を示していた。また、弥生町大坂本の本格派、裁窯の作品も、これからの生長がたいに期待されるすべしであつた。

当初七〇点前後とふんでいた出品点数も百三十点を越し、參觀者も両日で延べ八百人ばかりという盛況であつた。殊にうれしかつたことは三日午前十時からの「お話し大きく会」には、福泉寺和尚・養賢寺老師も臨席下さり、平田先生・中村義雄氏・清家亮先生、本匠村の高橋智氏などからも、それぞれ体験を通してのお話がきけたことであつた。その座談会がつづいては、聞かぬ參觀者はつづき、作品をながめながらも体験談に耳をかたむけていた。

佐伯の陶芸は、歴史的な伝統こそ貧乏けれど、土をこねて、器をつくってこれを焼く技術は、必ずやふる里佐伯の風土の中で、これから花と咲くことである。そのため、この度の史談会の催しが、何分のお役に立ったなら幸いである。

尚、この展示会に格別のご支援とご協力いただきました前記の方々、水が谷の矢野好信氏、文化会館の皆様さんへ、心からお礼を申し上げます次第である。

